
ココロノヤミヲトカスヒト

竹野千代

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ココロノヤミヲトカスヒト

【Nコード】

N6495Y

【作者名】

竹野千代

【あらすじ】

夜は俺にとつて、底のない地獄だった。高原に出逢う迄は。生徒会の書記兼図書委員の人気者。そんな高原に誘われ図書委員になり、持っていなかった携帯でメールのやり取りをする内に……俺の心を蝕む闇は、少しづつ溶かされていくのだった。

一（前書き）

出来れば沢山の方に読んで頂き、冷静で的確な感想を頂きたいので、よろしくお願い致します。

夜の闇に、墜ちていく。

夜は俺にとって、底のない地獄だ。

人間としての尊厳を奪われ、

信じてきたものや縋るものを踏みにじられ、

獣の様に地を這わされる。

夜の深淵に足を掴まれ、引きずり込まれて――

俺の一部が、また死んでいく。

心が、欠ける……

やっと死んでくれた。まさか誰かの死を喜ぶ事になるなんて、親が知ったらビンタどころの話じゃないだろうけど。

だけど、ようやく解放された、という安堵は嬉しさをしか俺に抱かせない。俺がどんな目に遭ってきたのか、話してやれでもしたらきっと、同情の後に、「そりゃ仕方ないな」と誰もが思うに違いない。

――やっと死んでくれた。その事実を、俺は一人噛み締める。もう怯えずに済む。急に乱暴にドアが開けられる事も、頬をはたかれ床に引き倒されのしかかられる事も、激痛の屈辱に歯を食いしばる

事ももうないのだ。

もう、誰かに支配される事もないのだから。

平和な毎日。だけど暗く引き籠もってしまった期間は長く、以前の様な明るさで皆と向き合う事は出来なくなっていた。

極度の人間不信。裏切りを経験すると、人を信じられなくなるもんだろう？ それだ。

好きな人でも見付けたら、心は癒されるのだろうか。傷付いた心が元に戻る事など、あるのだろうか……？

「橘！」

呼び止められ、足を止める。名前を呼ばれていながら自分から振り向く事は出来ず、俺は声の主が近付き、自分の体の前に回り込んできたのを俯いて見ていた。

今図書室で近くに居た高原が、立っていた。何か用、などと気易く尋ねる事など出来やしない、俺は隠せない警戒に身を硬くしたまま、窺う様に相手を僅かに視界に入れるだけだ。

……背、高いよなこいつ。殴られたら上からの体重が載って、かなり痛いだろうな。

息を整えて相手が喋れない少しの間にも、卑屈な想像が頭を占める。馬鹿か俺、と目線を反らした時にようやく、相手は口を開いた。「橘さ、本好きだろ。図書委員にならない？」

——突然、どういいうお誘いだ？ ぽかんとして、俺は視線を目の前のメガネ君に戻した。

名を高原正直たかはら まさのちかと言う。ちょいちょい同じ棚の似た様な本を探して図書室で逢うから、知っている。生徒会の書記なんかしている奴だ、

真面目なのにユーモアもあって、誰に対しても非常に優しいらしい。更に眼鏡の奥の優しい気な垂れ目が素敵、などと、ビジュアル面でも女子の人気は抜群らしい。男子クラスのうちの組でも、成績優秀で有言実行、そのくせ気さくな性格だと慕われている様な噂を耳にする。

そんな人気者が、何で俺なんかにそんな頼み事をするんだろう？理由が明らかにならないと口を開く気にはなれない、俺は黙って相手の言葉の続きを待った。

「委員メンバー、元々足りてないんだよ。俺も生徒会兼任でやってる位だし。今回一人転校しちゃうんで、更に人員不足になる。橘さ、よく本を正しい順に並び替えたりしてくれてるし、喋ったりしてマナーの悪い奴にそつと注意を促してくれたりもするだろ。そういう真面目な人にメンバーになってもらえたら有り難いんだ」

……まさか、そういう行為を人に見られていたなんて。意識せざるにしていた事を改めて取り上げられたりすると、何だか恥ずかしくなってしまう。答えに窮して、俺は視線を彷徨わせた。人気者の優男は続けた。

「橘が座つてるとき、図書室利用者も増える筈！だからさ、頼むよー」

拜む様に手を合わせて、相手は頭を下げてきた。委員になる事自体は……突然で驚いてはいるが、まあ別に断固拒否、という訳でもない。随分困っている様だし、自分が手助けになれるのなら手伝ってみようかな、と思う。多分人より本を相手にする事の方が多いだろうから。だけど、今気になるのは。

「……利用者が増える事、ないから。それ期待してなら他当たってほそつと言うのに、相手は顔を挙げた。ああ違う、俺が座つたつて利用者なんて増える訳ないよ、とか軽く返せばいいのに、……わざわざ相手に嫌な思いをさせる様な言葉を選んで。俺の馬鹿、俺つてば根暗……！」

反省に、唇を噛む。なのに相手はーふつと笑って、気を害して

いない筈はないのに、柔らかな表情と優しい声音で告げるのだ。

「綺麗な顔、してるのに……自覚ないんだ。もっと前髪短くすればいい、目元隠すなんて勿体ない」

主旨のずれた台詞と共に、すっと伸びてきた手が俺の前髪をさらりと掻き上げる。ーびくりと身を跳ねさせて、どうにか相手の手を乱暴に振り払う前に、後退り身を逃がすだけで済んだ。過剰な俺の反応にも動じない高原は、当初の目的を取り戻す様に問いの形を取った。

「図書委員さ。入ってもらえない？」

ばつの悪さ、だけで頷いたりはしない。相手の真つ直ぐな強い瞳に何か引き寄せられてしまったらしかった。躊躇いがちに、俺は小さく頷いた。

有難う、と両手を取られぎゅっと握られる。逃げようにも相手の力は強く、僅かな接触にすらも反射的に怯える俺の手は、隠せない程に震えていた。

ー相手の手が離されたのが俺の震えが止まった直ぐ後だった様に思えるのは、俺の気のせいなんだろうか？

明日委員会だからそこで橋を紹介する予定、と高原は昨日それだけ言って去っていた。委員会って、放課後か？ 図書室でやるんだろうか？ 疑問は浮かぶが、クラスが違う高原の元に聞きに行く事なんて出来る訳がない、またそんなに必死で知っておきたい訳でもない。今日と言う事さえ確かなら、どうでもいい。

お馴染みの消極的な自分が出した結論に納得していた一時限目の後の休憩時間、ー高原が現れた。何やら教室内が騒めいた、と思ったら、高原が前のドアから顔を覗かせてきていたのだ。

直ぐにこちらを見付けたらしい、にこつと人好きのする柔らかな笑みに向け、あろう事か教室の中迄入ってきてー

「橘！！ 今日放課後、16：45位からね。大丈夫？」

今が大丈夫ではない、何なに、と皆がひそひそ言い合っている声が聞こえてくる。こんな注目を浴びてしまうなんて……、かあつと赤くなり、俺は焦ってうん分かった、と早口で頷いた。それだけを見届けて、満足したのか高原は更に深い笑みを残し、待ってる、と意味ありげにも取れる様な一言を落とし、爽やかに教室を出て行った。

一旦しーん、と静まって、またざわざわと俺を遠巻きに見ながら教室内が騒めく。スター並みに皆の憧れや羨望の的である高原と、一人での読書の世界に没頭する事で外界との接触を極端に絶った俺との関わりの不思議に、皆黙っていられなかったらしい。意を決した様に、数人が声を掛けてきた。

「なあ、今日の放課後って何？」

「あいつと仲いいの？」

そう言えばクラスの誰かと言葉を交わす事自体どれだけぶりだろ、とふと考えて、はっと我に振り返る。

「委、委員会が。今日初めてだから」

なあんだ、と一斉に教室内が納得したらしい。ひとまずの皆の関心が自分から離れ、俺はほっとする。

「新メンバーを紹介しまーす！！ 二年二組の橘海璃君でーす！」
明るい声で、高原は俺の両肩に手を載せ、皆の前に差し出す様にして告げた。

三年の教室を借りたこじんまりと並んだ委員メンバーは、本の借り出しと返却の際の対応で顔を知っている人ばかりで、向こうも俺を知ってくれているせいか、和やかな雰囲気の流れていた。人居なかつたから助かるよ、大変かも知れないけど頼むな、と気さくに声を掛けられ、抱負を一言、と委員長に促され、一生懸命頑張ります

のでご指導宜しく願います、と当たり障りのない言葉で挨拶し、後は繰り広げられる話し合いを聞いていた。

皆が順に当番制で図書室での貸出し業務を行っている為、俺にもじきにカウンターに入る仕事が回ってくるらしい。でもその間に好きな本を読んで過ごせるのだとしたら、俺にとっては天国の様な委員だ。

閉会し、皆が解散し帰った後に、わざわざ俺の為に委員メンバーの名前をもう一度教えてくれたりして、高原は実に親切な奴なのだった。自然と笑んで有難う、と呟いていた俺に、高原はにっこり笑ってくれた。

「それはこっちの台詞。突然無理矢理誘ったのに、快く引き受けてくれた橋の優しさにこそ感謝だよ。俺ってば見る目あんだよね」

優しい口調、いい奴だなと素直に好感を持てる。男女問わず人気者な訳だ。こんな相手と交流を深められれば、心を覆う氷は溶けるだろうか。人を信じてみようかと、止めていた足を踏み出せる様になるのだろうか……。

……期待する様な目で相手を見てしまってもいたのだろうか、何だかゆっくりと近付いてきた高原の顔が、その目が、今迄感じた事のない何か危うい空気を漂わせ、絡め取る様に……

「ーばつと勢い良く体を遠退けた、何だ今の雰囲気、と俺は焦る。キ……キス、されるのかと思った。

まだ悠然と不思議な空気を纏わせたままに、高原の目が熱っぽく俺を見ている様に見えた。見えた、だけー人付き合いを長く絶つとこんな事になるんだ、と俺は自分の過剰な勘違いがもたらしてしまった恥ずかし過ぎる雰囲気をもとにか消すべく、武骨な声を挙げた。

「い、色々と親切にしてくれて有難う。今日は図書室閉館日って言ったよね、早く帰ってゆっくり出来る機会を有効に使わないと。また次に逢った時に色々教わろうかな、俺も今日は頭がいっぱいだから」

馬鹿みたいに予防線を張った俺の物言いをそうだね、と笑って流してくれた高原は、矢張りもう今はおかしなところもなく見えた。俺ってば何混乱してんだろ、と頬が熱くなる。他人とここ迄近い距離で過ごす事など随分久方振りで、妙に意識してしまった自分が勝手に変な妄想をしてみましただけじゃなかった。

「図書当番表も一週間以内には出るだろうから、またその時にね。そうだ、連絡取り合うのにさ、メアド聞いておきたいんだけど」
ぴくつ、と俺は背筋を伸ばした。小さな声で、ない、と呟く。

「ない？」

「……俺、携帯持ってないから。パソコンもないし。ない」

「あ、そうなんだ」

珍しいな、と言われる事を構え、何となく感じてしまう劣等感に身が縮まる思いだ。だけど高原は違っていた。大した事ではないといった風に、さらりと会話を続けてくれるのだ。

「図書委員としては、メール出来たら嬉しいかも。言い忘れてたけど土日にも図書室開ける時あるから、予定当番日の当日の変更とか出ちゃうんだよね。そういう時の連絡とかにさ」

「ああ……」

それは必要だ、と俺は頷く。わざわざ連絡の為に高原に教室に来て貰うなんて、申し訳ないし恥ずかしい。考える俺に、高原は一言付け加えた。

「それにさ、好きな本発表しあったりさ、本以外の好きな事語り合ったりも出来るしね」

それには、咄嗟の返事が出来なかった。え？ とか馬鹿みたいに目を丸くする俺に、高原はお馴染みの柔らかな笑みで言うのだ。

「友達としてさ。橘とメール出来たら嬉しいな、俺」

無邪気な子供の様な顔で。どんな意味合いで発せられた言葉なのか。

いつの間にか高原と自分は友人になっただけならいい、ただの知り合いではなく。それすらも何だかどきどきして消化しきれずに居る

のに、弾けんばかりの人懐こい笑顔を向けられて、俺にはどう答えればいいのか分からない。

視線を反らしながら俯いた俺に、真面目な声で高原が言い出した。「ごめん、携帯持つのお金も掛かるし、強制出来る様な事じゃないのね。まあ連絡手段なんかさ、いつでも教室に言いに行けばいいし、靴箱に手紙入れたりも出来る話だしさ」

明るい高原の声、また相手に気を遣わせてしまっているー最大限に勇気を振り絞って、俺はぱつと顔を挙げた。

「携帯っ、買、買おうかなって丁度考えてたところだったんだ。……本当に」

付け足した処が余計に不自然に響いただろうに、高原は深い穏やかな笑みで俺を見て、尋ねるのだ。

「メアド決まったらさ、一番に俺に教えてくれる？」

頷いた俺に微笑んでみせて、それで話題は終了とばかりに高原はじゃあ、と立ち上がる。気恥ずかしい俺には、そんな高原の自然な気遣いは心底嬉しいものだった。

親の了承を受けて、携帯を持たせて貰う事になった。他人どころか親とすら付き合いを避けている俺が、人とのコミュニケーションツールを必要とした事に、両親は驚きつつ喜んでいる様に見えた。

携帯を持つに当たって、一つ勇気を持ってトライしなければならぬ問題が浮上した事に、俺は気付いてしまった。心は大分怯むが、逃げずに挑まなければいけない問題だ。今からの新しい人生の為に、これからの、自分の為に。

教室内に声を掛けに行く勇気などはない。昨日高原が教えてくれ

た連絡方法、靴箱に手紙を入れるという方法を取らせてもらった。

指定した返事のメモが靴箱に返されると思っていたのに、放課後、また高原はわざわざ俺のクラスにやって来た。

注目を浴びたくないから取った手段だったのに……慌てて鞆を引っ掴み廊下に出る俺に、高原が小さく言った。

「ごめん、目立つ様な事して。でもさちよつと、手紙で返すには嬉し過ぎちゃってさ」

意味が分からない俺に、周囲を気にしてか高原が来て、と俺の腕を取る。ここは素直に人の居ない所に誘導して貰おう、と俺は早足の高原に歩調を合わせて歩き出した。

図書室にでも行くのかな、と思っていた俺を、高原は校外に出て、見知らぬ道を歩いてどこかに連れて行く予定らしい。

……こういう、先の見えないシチュエーションは苦手だ。顔を知った人間に痛い目に遭わされた経験を持つ俺は、否定を上回るフラッシュバックを重ねてしまうから。幾ら高原はそんな事をする様な人種じゃないと自分に言い聞かせようとしても。

だけど、苦痛を訴えてみる間もなく、高原はそこが目当ての場所だったのか、小さな公園に俺を導き入れた。木の切り株の断面になった椅子が点在するそこに、高原は無造作に座る。一つ一つが近過ぎず遠過ぎず、いい感じに配置された椅子に安心して、俺も高原の隣のそれに腰を下ろした。

「ここさ、何か落ち着かない？ 好きでよく来るんだ、俺」

分かる、と俺は頷いて。ただ、公園で話しよう、とでも歩きながら教えてくれたら良かったのに、と一言抗議してやりたい俺としては、不機嫌をそのまま口に載せた言葉を返していた。

「いい場所だから今は座ったけど、そうじゃなかったら俺帰ってたよ」

不意を突かれた様に、高原が驚いて俺を見た。高飛車に響いた不器用な強気の発言に早くも後悔している俺は、思わず目を伏せて、そのまま顔を下に向けて、誤魔化す様に言い添えてみた。

「……知らない場所とか、怖いから。今から何するとかが分からないのも。黙って連れて来られるの、本当は俺駄目なんだ。だから……」

「ごめん」

まだ言葉を探していた俺を、高原が低く遮った。今回は深く落とした顔を挙げられない、ぐるぐる回る反省に泣きそうになってしまっていたからだ。

「ごめん、とまた高原が口にした。続く言葉を待つ俺に、降りてきたのは言葉ではなく……」

「……視界が、暗く覆われた。次いで感じる、体の圧迫。体温。間近な心臓の搏動。爽やかな、でも男の匂い……」。

抱き締められた、と気付いて、咄嗟にもがく様に手を出そうとした。なのに高原の強い腕は、身を動かす僅かな隙間をも俺に与えてはくれなかった。

羞恥よりも恐怖が先に立った、抑えようのない震えが全身に走り、その違和感にしろつか、高原がゆっくりと腕を解いてくれた。

椅子から動けず、その場で身を縮める俺を解放して、でも高原の手は俺の両腕に優しく残されたままだった。がたがたと震える俺に、静かな高原の声が降ってきた。

「ごめん……君の事を、まだ俺は何ひとつ知らないみたいだね」

予想とは違う言葉、それよりも声が近くなった事に、高原が自分の前にしゃがんだらしい事を気配で感じ、俺はびくつと肩を揺らした。

「どつやったら、君の事を傷付けなくてすむのかな。俺さ……君に近付きたいんだ。君の、力になりたい。君を救いたいと思ってる」

真剣な口調が、高原の人間性を表している様に聞こえた。恐らく嘘偽りのない、純粹な心配。触れた腕からも優しさが流れ込んでく

る様な錯覚、身を委ねたくなる安心感……。

体の震えは引いた、丸めた体から俺が顔を挙げる事など期待して
いないのだろう、高原はまだ優しい言葉を続けてくれる。

「図書室でよく逢ってた。何でかな、君の事が気になって仕方が
なかつたんだ。明るく笑ってる方が似合ってるだろうに、いつも
俯いて暗い顔して。そんなの本来の君じゃない気がしてさ。何か…
…心の底では助けて、って叫んでるみたいに見えるんだ」

……問題が、触れられたくない核心に近付きつつある。高原は、
どこ迄を知っているのだろう。危険だと、頭の中で警鐘が鳴り始め
るーー思わず、高原の手を振り払う様にして立ち上がっていた。

「たちは」

「気持ちだけ、有難う。けど……救ってくれなくていい。力になる
とか。要らない」

小さく、でも強く言い切った。そのまま顔を見られない様に、き
びすを返して走り出した。高原が追って来る事がないのは分かっ
ていた、でもがむしゃらに俺は走っていた。

……自己嫌悪。優しい相手の親切心を踏みにじってしまった。越えようとした壁を、また自分から高く頑丈なものにしてしまった……。

行きたくない気持ちが必要なくする、周囲より遅く歩いているのに、学校にはきっちり着いてしまうのだ。

考えるのは昨日の事ばかり。呆れて、もう図書委員なんてしてくれなくていいから、と高原に言われるだろう事を覚悟していた。

昨日の朝、俺は高原の靴箱にこうメモを入れた。『携帯を買おうと思っています。高原の持つてる携帯の会社はどこ？ 同じだと便利かなと思ったので』

でももう、携帯自体が必要なくなっちゃったな、と俺は溜め息をつけて靴を脱ぐ。開けた靴箱の中に置かれていた大きな封筒に、俺は面食らった。

Docomoと印字された封筒に、中身は……電話機種のパンフレット。啞然とする俺は、ひらりと落ちた小さなメモに気付き、それを拾い上げた。

『姉貴が働いてるので、うちは一家全員ドコモです。良かったらパンフ見てね。買う時はゼヒ姉貴の店で!!! 頼みます 高原より』

そうして、右下に小さな文字で。『P.S:昨日はゴメン』。

――泣きそうだった。あんなに冷たく突き放したのに、恩を仇で返す様な仕打ちをしてしまったのに。嫌われて、避けられるだろうと思っていたのに。

――放課後に逢いに行ってみよう、と俺は思った。俺の方から謝らなきゃいけない、礼を言わなければならない。潔い高原の誠意に応える為に。

入って行く勇氣はない。教室の入り口から目立たない様に少し離れた場所で、出て来る人を見張るだけだ。

大分待って、ようやく見慣れた長身が何人かと話しながら出て来た。一人じゃないパターンは想定外で、声を掛けるタイミングを失い俺は焦った。

慌てて集団の後を追いつける。高原が行ってしまう、きっと今を逃したらもう俺は永遠に高原に声など掛けれなくなるのだ、また元の塞ぎ込んだ世界に逃げ込んでー。でもそれじゃ駄目なのだ、今、今こそ死ぬ氣の力を振り絞らないと……

切迫した考えは一瞬、極度の緊張に心臓がばくばくと鳴っている。それは自分には大きな音で、だが他の人には聞こえていないのだとは気付きもしなかったー。心臓の騒めきに掻き消されない様にと、俺は叫ぶ様に呼んでしまっていた。

「たかはらあつ!!」

尋常じゃない大声に、ありとあらゆる場所から視線が集まってしまった。振り向いた高原は、直ぐに破顔し、じゃあなと友人達の肩を叩き、足早に俺の方に歩いてきてくれた。

「図書室、行こうか」

俺の知った場所を指定してくれる高原の氣遣いに感謝しつつ、恥ずかしくて堪らない俺は、何度も頷き慌てて歩き出す。

中での私語は厳禁なので、今居るのは建物の裏だ。後ろに広がる林との境界にした、小さな木の杭が張り巡らされたそこに並んで座って、昨日の事怒ってないのかな、と考えつつも何と切り出そうかと俺が言葉を選ぶ間に。

「まだ、顔が赤い」

言つなり手が伸び、左頬に触れられた。びくつと体を伸ばす俺が逃げの体勢を取る前に、だが高原の右手はすつと落とされた。くすつといったもの笑みで、高原は続けた。

「あんな大声出さなくても、ちゃんと俺橋の声聞こえるよ。必死だったの？」

含まれる、からかいの響き。自分の心臓の音が、なんて言い訳にするにも恥ずかしくて、俺は頷く事にした。大体、今日は謝りたくて来たのだ。こうやって何事もなかった様に接してくれる高原に感謝を伝える為に。

だから、俺はまず、ごめんなさい、と口にした。ん、と自分に向けられる相手からの視線を微かに避けながら、俺は続けた。

「高原が俺を心配して言ってくれたりしてくれた事、否定したりして。ごめんなさい。それと、有難う。俺みたいなのに掛けてくれて、俺の分かってなくて気を害する言葉とかにも、怒ったり呆れたりしないで、こうやって俺の事許してくれて。本当に有難う」

一気に言つた俺を見つめる高原の目は、本当に透き通っていて優しい。どんな返事が返ってくるのかと思つたら、高原は笑みも変えずに尋ねてきた。

「頭、撫でていい？」

「は?!」

驚いて目を丸くする俺の顔にすいつと顔を近付け、高原が真面目な口調で言つた。

「まず逃げようとする。でも今日は自分から俺のここに来てくれた。嬉しいからぎゅっとしてやりたいんだけどさ、橋にとっては刺激強過ぎるだろ? だからせめて、頭撫でたい」

……その理屈は筋が通つたものなんだろうか、と俺は考えてしまふ。けど普通に考えて男の頭なんて撫でたくなる筈もない、高原なりの相手の頑張りを評価するやり方なのかな、と俺は結論付けて、頷いた。

「う、うん。どうぞ」

どうぞはおかしいだろ、と自分にツツコミを入れた俺の頭に、優しく高原の手が載せられる。本当になでなで、とまるで子供にする様に手が動き、直ぐ間近に居る高原がどんな顔でそんな事をしていいのか気になりつつも、それを見てしまうには恥ずかしくて、俺は目を伏せていた。

……いつ迄、撫でてんだろ。さすがにもういいんじゃないか、と俺はちらりと上目遣いに高原の顔を窺い見ようとした。校内だし、どこから誰に見られているかも分からない。こんな、あらぬ誤解を受けてしまいそうな怪しい行為……。

俺が見上げた気配に気付いたのか、高原は手を止め、ようやくゆつくりとその手が下ろされた。何だかこそばゆい様な気恥ずかしさに、俺は言う言葉も見付けられずに視線を彷徨わせていた。ぼつりと、高原が問いを口に載せた。

「結局のところ、どっち？」

「え？」

主語を省かれ、何を尋ねられたのかが全く分からない。説明する様に、高原が言い直した。

「昨日はさ、俺が困らせる様な事したからさ、いらないうって言うだけ。俺、君の力になりたいうって言ったよね。救いたいうって。やっぱ今日聞いても答えはノーなの？」

「……一歩で、決る様に胸元に入り込まれた感じだ。避けられないパンチ……ごくり、と俺は努力して唾を呑む。

瞬時に巡り巡った思考が、こんな状況で浮かんだとは思えない、都合の良い逃げ口上を落としてくれた。飛び付く様に、俺はそれを口に載せていた。

「……高原とこうして仲良く喋ったり出来るだけで、俺には救いになってるよ。すごい力貰ってる。これ以上に幸せな事ない位だよ」

笑ってみせたのに……笑い慣れない俺の笑顔がそんなに不自然に見えたのだろうか、高原はどう見ても納得なんてしていない顔で、じいっと俺を見つめている。

どうしよう。高原は、妥協を許さない人の様だった。中途半端な逃げは解決にはならないのだろう。上手い事言えた、と内心ほっとしていたのだけれど。

「えっと……」

考えて、考えて、俺はようようの呈で言ってみた。

「高原に出逢えた事が、本当に俺の救いだと思う。高原に声掛けて貰わなかったら、俺……生きてるのに死んでるままだったよ。高原のお陰で、ちゃんと生きてるって思ってる。嬉しい気持ちが増えて困ってる位」

見つめられて、最後の方なんか何を言ってるんだか自分で恥ずかしくて、俺は穴があつたら入りたい状態だ。そんな俺を、気が付けば直ぐ近い位置から視線を合わせてきて、高原は囁く様に尋ねるのだ。

「それ、本音？ 俺、役に立ってるの？ 橘の嬉しい気持ち、本当に増えてる？」

何の為の確認なんだろう、と俺は思う。とろりと絡みつく様な高原の目、甘いとしか思えない囁きに、また抱きすくめられる事になつてしまいそうで、俺は必死に予防線を張ろうと試みた。

「恥、恥ずかしい事の方が多いけど」

言いながら、じりじりと体を後ろに逃がしてみる。そんな俺の企てに気付いたのか、橘、と高原の手が伸びてきたー

バアン、と叩き付ける様にドアが閉まる音、それに被さる様に不機嫌な叫び声。

「出てきやいいんだろっ！！」

ガアン、と壁に蹴り返入れて、声の主が足音も高らかに歩いて行く。いつも図書室でふざけたり利用者に絡んだりする迷惑な人だ、と俺は気付いていた。抱き寄せようとしていたらしい手を俺の背に載せていた高原が、図書室から追い出されたらしいその乱暴者に気を取られた一瞬。

……いい時に大きな物音と大声、感謝します、と俺は、もう見え

ないその人の背中に内心頭を下げ、高原が動くより先に体を後ろに逃がしながら立ち上がった。離れた高原の手、酩酊していた様だった表情が醒めた様に、高原が何か言い掛けた。遮る様に、俺は強く口にしていた。

「とっ、友達だよな?!」

まだ何も返さない高原に、釘を刺す目的で繰り返す。

「高原と俺、ただの友達だよな?」

好きとかなしにーそう付け足したかったけど、実際口に出れる筈などなかった。高原の優しさは、友人として心配してくれる範囲内のものだと思えた。昂ぶる様に色香を纏わせるあの熱っぽい目に、おかしな意味はないのだと思いたかった。

充分に離れた距離を置いて全身に緊張を走らせる俺を見返して、高原がふっ、と笑った。

「うん、友達。ごめん、何か誤解させちゃったみたいだね」

軽く返して、服に付いた草や砂をはたきながら高原も立ち上がった。向こうからあっさりと言われて、俺は意味もなく首を横に振ったりしている。近付いてくる高原にまだびくりと身構える俺に、置きっぱなしだった鞆を手に取り渡してくれながら、相手はさらりと言っただ。

「ごめんね。俺さ、可愛いもの好きフェチが尋常じゃなくてさ。今もそうなんだけど、君、人に慣れてない子犬過ぎるから。何しても可愛く見えるから、つい手を出したくなっちゃうんだ。あーよしよしって感じにさ」

……先程頭を撫でてきた感じ、に思えばいいのだろうか。男だとか人としてじゃなくペットの様に見られてしまっているらしい事は不快ではないが、可愛いとか称されるのには問題あるかも……。

複雑な思いの俺に、高原は静かに告げる。

「ごめんね。何か俺舞い上がっちゃったみたい。橋に友達だっと思ってもらえてんのも、純粹に嬉しくてさ。……俺達、友達なんだよね?」

今度は高原が俺に確認してくる。どきまぎする恥ずかしさがまた沸き上がるが、どうにか真面目な顔で俺は頷いた。

「……うん、勿論」
にこつと笑ってみせて……帰ろうか、と高原は言ってくれた。

――閉じた目の奥に、高原の優しかったり色っぽかったりする顔が貼り付いて、なかなか眠りは訪れないのだ。

次の日、その次の日と高原は現れなかった。安堵と寂しさを半々に感じたりする自分が意外だった。そうして今日は金曜日、今日を逃せば月曜日迄高原に声を掛けられない。大事な用事に、登校して一番に俺は靴箱への手紙を置いた。

『携帯を買いたいから、高原のお姉さんの勤めてるお店に案内してもらえると助かります。今日の帰りにでも、高原の用事がなければ……』

――どんな形で返事をくれ、といった事を指定しない一方的な文面に、俺は後悔していた。これじゃまた、高原を来させてしまうかも。俺って何て考えなしなんだろう。

自分からまた高原の教室に行くべきなのか……踏み出せない躊躇に悶々とする俺を、休み時間に担任の先生が呼んできた。

「おーい橘、新生図書委員。預かりもんだぞ」

渡された用紙は、この間初めて紹介された時の図書委員会のものであった。二枚に亘る、議事録、と題された書類には、正式に俺を図書委員に任命する、というのに始まり、話し合っていた内容や、恐らく決定したらしい放課後や土日解放時の業務担当者の割り振りの表が示されていた。

目を通して、最後の行の様に付け足されたものらしい高原のメッセージに気付き、俺は破顔した。『姉貴大喜びだよ。今日の放課後、校門の左側でおちあいましよう。急いで行くから!』。

目立たずに連絡を取る事を考えてくれた高原の気遣いに、心底俺は感謝する。でもふと気付いた、高原は本来生徒会に所属しているけれど、人員不足の為に図書委員を兼任しているのだ。確か部活には所属していないらしいが、忙しいには変わりないだろう。

そんな合い間に、自分なんかにつき合わせるのには申し訳ないな、と思う。まあでも今日携帯を買えば、これからの連絡は逢わなくても出来る訳だから。今日だけ、我慢して貰おう。

そんな色々を考えるのが楽しいと感じる事に、俺は気付いてはいなかったけれど。

校門の左側、地形的に少し窪んで大きな木が植えられた場所に、高原は既に待っていてくれた。俺が声を掛けようとする前に、俺の後ろから数人が高原を呼ばわった。

「マサじゃん。何してんのー」

……人気者だもんな、と気付かれない様に下がりながら、俺は思う。俺なんかとの接点、皆に不思議に思われるだろう。矢張り携帯は早く持つべきだな。

わざと隠れたのに、声を掛けてきた友人数人にまずおう、と返しただけで、あろう事か高原は俺の居る方に向かって来ている様に見えた。まさかと目を剥く俺の前に高原は立ち、極自然に俺の手首を掴みー

「今日は橘と買い物なんだ!」

わざわざ皆の前に引っ張って立たされる、まるで皆に自慢するかの様に……友人達が、ああ図書委員のね、こないだの、と納得するのを、俺は困惑して高原を盗み見ながら俯いていた。

どっか行くの、と聞かれ、鞆でもぶらぶら見に行こうかな、などと高原は適当に返している。じゃあな、邪魔しちゃ悪いからな、と友人達が去って行くのに手を振っている高原の右手から、まだ掴まれたままだった自分の手を、俺は乱暴に取り戻した。目を向けてきた高原を、つい俺はきつと睨み上げる。

目立つ事が嫌なのは、承知してくれていると思っていた。委員会の議事録に返事を載せる手段なんてとってくれた配慮が、その証拠だと。なのに。

「ここでもいいの？ また誰かに声掛けられちゃうよ」

真面目な顔で言われて、俺ははつとする。次々に下校して来る生徒達が二分の一の確率で通るここに、いつ迄も居られない。何も言わない高原に、俺が促す形になった。

「……お姉さんのお店に、案内して貰える？」

うん行こうか、と歩き出した高原に、やや離れて俺はついて行った。

考えてみれば、俺が高原に怒る義理はないのだ。もしかして今日、高原が誰かからの誘いを断って俺を優先させてくれたという可能性だけである。俺は俺一人の一方的な要求・不満を相手にぶつけているだけだ、相手がどんな人物でどんな状況にあるか、などを一切考えないで。

歩きながら、いつも何か話し掛けてきてくれていた高原が今はずつと無言なものも、勝手に怒りをぶつけた俺に気を害したからかも知れない。乱暴に手を振り払ったりして。

……見上げる事は出来ない。そんな勇氣はない。だけど、この重苦しい雰囲気は何か自分が打破しなければ。

小さく、俺は努力して声を落としてみた。

「……ごめん。俺が怒るのおかしいのに」

「え？」

俯いた声は下に流れる、高原に聞こえないのは仕方がない。僅かに顔を挙げて、俺はまた口にした。

「俺が勝手に怒ったせいで、今嫌な感じにさせてる。……ごめん」
高原の返事はなかった。本当に、相当嫌な気分に合わせてしまったんだ、と俺は軽々しい自分の物言いに今度は蒼ざめる。あの穏和な高原に、沈黙を選択させるなんて。

もう、足が進まなかった。道の真ん中だと分かっているながら、俺は立ち止まってしまふ。橋、と掛けられた高原の声が優しいのに、来て、と俺の二の腕に触れ促す様に引つ張る手付きが柔らかく慎重なのに、俺ははっと顔を挙げてしまった。

怒ってはいない、見慣れた優しい笑みを浮かべた高原の顔を見てしまつて、でもこれはきつと建前の顔なんだ、と俺は目を反らした。先程振り解いた事を反省しているだけに、引つ張ってくる高原の手を今度は俺はどかせない。高原の優しい声が、恐らく身を屈めてくれたのだろう、近い位置から俺の耳に入ってきた。

「少し歩いたら、こないだの公園に着くから。来て」

頷いた俺は、優しく手を引く高原について、止まってしまつていた足を無理矢理に動かした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6495y/>

ココロノヤミヲトカスヒト

2011年11月20日18時49分発行